

最強の職業は
勇者でも賢者でもなく
鑑定士（仮）
らしいですよ？
9

著 **あてきち**
ATEKICHI

Illustration: しがらき旭

死者殺し

ヒビキの日本での友人たちが異世界で結成した冒険者パーティー！



シンドウタイキ
新藤大樹

ヒビキの親友。



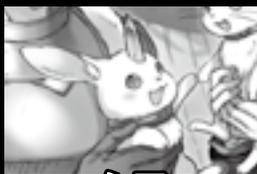
ヤマハラア マネ
山原亜麻音

ヒビキの幼馴染。



ハワタリコウイチ
葉渡候一

ヒビキの従兄で担任。



シラ

謎のクリスタルホーンラビット。



トヨツキキョウコ
豊月恭子

ヒビキの同級生。

地底都市 テラダイナス

ダンジョンの先にある伝説の街。



パトリア

テラダイナス市長。「三界の賢者」の一人。



クアント

パトリアの秘書。



アナスタシア

かつてクロードを育てたエルフ。死んだはずだが……？

神々

異世界を管理する上位存在。



主神

神々の頂点。軽薄。



理神

ヒビキにそっくりな神。



美神

語尾が変な美の女神。



イヴァル

邪神に仕える聖獣。

その他の神

冥神、医神、魔神、地神、海神、天神、戦神、善神、邪神

Main Character 主な登場人物



クロード

ヒビキに仕える獣人の勇者。邪神に命を狙われている。



マナベヒビキ
真名部響生

異世界に召喚された高校生。職業は「鑑定士(仮)」。



エミリア

ヒビキの異世界での初めての友人。エルフの弓使い。



チリアン

ヒビキの妹分である賢者。魔法で皆を助ける。



サポちゃん

理神の聖獣。



ウエネ

魔神の聖獣。



ユリ

人間と魔族のハーフ。実は魔王候補生。



タミヤ

宿屋の受付嬢。



パルス

冒険者ギルドのギルドマスター。



ジュエル

冒険者ギルドの副ギルドマスター。

ハハラスニア王国の都市。ヒビキの拠点。

ローウエル

鑑定士^仮大百科

冒険の中で明らかとなった用語や事件を徹底解説!

職業

15歳になると神から与えられるもの。実際に就く職業とは別で、本人の素質や気質を表している。『鑑定士(仮)』は、普通の人間ではないヒビキのために主神が作った特別な職業。

神選職

神に選ばれた特別な者だけが授かる超希少職。武勇に優れた『勇者』、魔法に長じた『賢者』、その両方に才を持つ『魔王』の、3つの神選職がある。勇者は4人、賢者は7人、魔王は8人まで同時に存在できる。

不動の鎖

勇者であったクロードを弱体化させている鎖状の呪い。ヒビキたちの尽力により、8本のうち4本の鎖を解除した。

迷宮都市

ダンジョンを攻略した者のうち、さらに選ばれた者だけが辿り着ける場所。魔法もスキルも使えず、神々の干渉さえも拒絶する。3つある迷宮都市のうち、ヒビキたちは地底都市テラダイナスと行き来できる。

神々の世代

11人の神は第一世代と第二世代に分けられる。創世期から生き続けている主神、魔神、医神が第一世代。ある事件で一度死亡し、再誕した8人の神が第二世代。第二世代の中に、主神と敵対する者がいるようだが……?

ハバラスティア王国の東にある街、ローウエル。大陸最東端を占有する土地型の魔物、メイズイーターに最も近い街だ。

ローウエルとメイズイーターの間には、冒険者達が仕事に利用する森が広がっている。ローウエルでは『東の森』とだけ呼ばれていた。

「ああ、もう！ やつと出られたーっ！」

ローウエルに面する森の奥から、怒りと疲労を含んだ大きな声が響いた。やがて、くたびれた雰囲気少女が姿を現す。荷物はなく、少々軽装に思えるが、その出で立ち

は冒険者だろう。

肩まで伸びた美しい黒髪を靡かせ、少女はげんなりとした顔で街道に歩み出た。

少女の名をイヴェルという。正式名『イーヴェルンゲンシュタイン』。この世界を創造した十一の神の一人、邪神に仕える聖獣の一体だ。

聖獣といいつつ、その本体は鏡である。今はその権能で邪神の姿を借りて人型に変身し、邪神から与えられた使命を果たすべく、神域から地上へ降り立ったのだ……数日前に。

「まったく。よく知ってる森のはずなのに、なんで道に迷っちゃったのかしら」



本来、神域に住まう神々や聖獣が地上に降り立つことは許されていない。あまりにも大きな力を持つがゆえに、地上へ与える影響が計り知れないからだ。

例えば、真名部響生のそばにいる魔神の聖獣ヴェネ。彼はスキル『魔導書』の化身となり、力と知識を制限することで、限定的に地上に降り立つことを許されていた。

しかし、イヴェルはその制限を無視して地上にやってきている。そのため、神々の目を盗んで通り抜けられるルートは限られていた。その一つが、ローウェルに近い東の森である。

何度も訪れているので、勝手知ったる場所のはずだった。しかし、今回はなぜか道に迷ってしまっただけである。

「はあ、まだ本調子じゃないのかな。邪神様ったら人使いが荒いんだから」
イヴェルはため息をついた。

少し前、イヴェルはローウェルの北にあるダンジョンにいた。そこで呪われた元勇者クロードと対戦し、あろうことか敗走してしまふ。肉体は酷く傷付き、しばしの療養が必要となった。

そうして一ヶ月以上、ぐーたらと休暇を楽しんでいたのだが、肉体が回復したと判断した邪神によって地上への出向を命じられたのである。

「まあ、いつまでも愚痴ったってしょうがない！ ちゃちゃっと仕事を終わらせてさっさと神域に帰ろうっと。最優先はアナスタシアの魂の回収として、クロードにもリベンジしなくちゃね……って、そうだった」

歩きながら、イヴェルはガツクリと項垂れた。

「あれ、依頼人に怒られたんだっけ。殺すならアナスタシアの前で殺せって……ホントに、面倒臭い依頼人だなあ。別に目の前でやらなくて、死体でも見せれば十分でしように」

可愛い顔をして、無慈悲な言葉を平然と口にするイヴェル。殺意を司る聖獣にとっては、大した問題ではないのだろう。まったく悪びれた様子はなかった。

「まあ、その辺は臨機応変に対応するってことで。とりあえず、せつかくローウエルの近くにいらんだし、まずはクロード達の所在を確認しようかな。私との戦いから今はどこにいるのやら。まだダンジョンの中なのか、既に街に戻ってきているのか。それとも……」

街の門に近づく頃、一度立ち止まったイヴェルは不敵な笑みを浮かべ――。

「さーてと、Eランク冒険者イヴェルちゃん、行っきまーす！」

――人懐っこい愛らしい笑みに切り替えると、ローウエルに向かって歩き出すのだった。



ローウエルの西に茜色の太陽が沈む頃。イヴェルは宿屋、『微笑の女神亭』の屋根の上にいた。人目につかない位置に腰を下ろし、屋台で買った串肉を頬張る。

「もぐもぐ……へえ、美味しいじゃない」

焼きたての肉の味を堪能しているが、彼女は浮かぬ顔をしていた。

「うーん、どうやらクロード達がこの街に戻ってきたのは間違いないみたいね」

街に入って半日。イヴェルはヒビキ達の情報を集めていた。その結果、先日まで『微笑の女神亭』を利用していたことまでは分かった。しかし、数日前に宿を引き払ってしまったらしい。

「既にこの街にいないことは確実。となると、あとは具体的な行方についてだけど……」

宿の従業員は情報を持っていなかった。有力な目撃証言もなし。

ヒビキ達は今、どこにいるのか。イヴェルはその情報を掴めずにいた。

（私に命を狙われていることは分かっているだろうから、そのあたり慎重になっているのかもね。

あーあ、あの時仕留められなかったことが悔やまれる）

北のダンジョン第二十階層にて行われた、イヴェルとクロードの戦い。本来であれば、たとえクロードが呪いを受けていない万全な状態の勇者であったとしても、邪神の聖獣である彼女が負けるはずがなかった。

しかし、イヴェルは負けた。

クロードが勇者として限界を超える一撃を放ったからだ。

聖獣は地上で倒されても神域で復活することができる。だがその場合、地上での記憶を保持することはできない。情報を持ち帰ることを優先したイヴェルは、やむなく敗走せざるを得なかった。

（おそらくヒビキ・マナベの力だとは思うけど、いまだに邪神様もその正体を分かっていない。戦

うことになったら注意が必要ね……その前に、見つからないことには何も始まらないんだけど！）
串肉を食べ終えたイヴェルは、両腕を掲げてうんと背伸びをした。

そして、とある方へ視線を向ける。

「……この街で情報を得られそうな場所となると、もうあそこしかないかなあ？」
イヴェルは冒険者ギルドを見つめながら、楽しそうに笑った。

太陽が沈み、ローウエルの街に夜が訪れた。既に真夜中を過ぎ、街は静まり返っている。

そんな中、無人の冒険者ギルドの通路を、足音一つ立てずに歩く少女がいた。

イヴェルだ。

（冒険者ギルドの警備って、正直甘いよねえ。まあ、魔法で封印してあったとしても、私には関係ないけど♪）

鼻歌でも歌ってしまえばそうなりズミカルな足取りで、イヴェルは進む。それでも、彼女の足音がこだますることはなかった。静かに、密やかに、イヴェルは冒険者ギルドを探索していく。

そして彼女は、職員用の書庫の前に辿り着いた。

ここにはローウエルに登録された冒険者の名簿など、個人情報に記載された書類が多数保管されており、イヴェルが求める情報が一番見つかりそうな場所だ。

（はつきり行き先が書いてあったりすると楽なんだけどもなあ……うん？）

書庫の扉を開けようと手を伸ばしたイヴェルは、違和感を覚えた。書庫に……誰か、いる？

隠れ潜むようなぼんやりとした気配を察知し、イヴェルは扉をわずかに開けた。

細い隙間から室内を覗き込むと、書庫を漁る人影が目に入った。イヴェルはニヤリと微笑む。

（あらあら？ なんだか面白そうな先客がいるじゃない？）

「ねえ、なーにしているの？」

音を立てずに扉をさらに開け、入室したイヴェル。彼女は背後から侵入者に声をかけた。

体格的におそらく男性だろう。イヴェルの声に驚いたのか、男の背中が一度ビクリと震える。し

かし、すぐに冷静さを取り戻したようで、男から動揺の気配が消えた——と思った瞬間、目の前からその姿が消える。

背後で、空気が揺れた。

いつの間にかイヴェルの後ろをとっていた男が、彼女の首筋に手刀を放とうとしていた。鞭のようにしなる腕が、イヴェルの意識を刈り取る。

男はそう確信したことだろう。しかし、男の腕が首筋を打ち据えた瞬間、彼の目は驚愕に見開か

れた。

まるで割れた鏡に映る虚像のように、少女の姿が砕け散る。

同時に、ガラスが割れたような音が室内に鳴り響いた。

「へえ、結構速いじゃない。まあ、私ほどじゃないけど」

「——っ！」

男は声の方へ振り返る。先ほどの少女が、書庫の椅子に足を組んで腰掛けていた。不敵な笑みを浮かべながら。

全身黒ずくめの男は、少女を鋭く睨み付け、短剣を構えて一気に駆け出した。

おそらく最初は気絶させるつもりだったのだろう。しかし、何らかの手段で攻撃をかわしたイヴェルを危険と判断したらしい。次は命を絶つべく、凶刃が彼女へ迫る。

しかし、結果は同じだった。

微笑む少女の胸に短剣を突き立てると、切っ先を中心に空間に亀裂が走った。その感触も、割れる音もまるでガラス——いや、鏡のようで、少女の虚像は碎けて消え去る。

「これは……！」

「はい、さんねーん。次は当てられるかなあ？」

背後から少女の声が響き、男は体を反転させた。そして再び、驚愕に目を見開く。

室内に何人もの少女の姿があったからだ。全て同じ仕草で、男へ微笑みかける。

「「「さあ、本物はどーれだ？」「」」

「ぐっ、幻影かっ」

苦虫を噛みつぶしたような声で唸る男。短剣を構えるが、まずい相手に手を出してしまったことを悟り始めていた。

（どれが本物だ。いや、全てが偽物の可能性も……ダメだ、分からない。この俺が！）

闇の世界で生き抜いてきた男は、これまでも幻術を相手に戦ってきた。経験を積み、幻術への耐性を身につけたつもりだった。

それでも、目の前の少女達を見極めることはできない。

何の勘も働かない。それは、相手が圧倒的格上である可能性を示していた。

背筋が凍る。まだ敵の「太刀すら浴びていないはずなのに、男は敗北の気配を察知していた。

短剣を構えたまま、男は徐々に後退る。仕留められないのなら、これ以上の戦いに益はない。

隙だらけの姿勢でクスクスと笑う少女。普段なら好機と捉えるところだが、男には挑発しているようにしか思えなかった。

ゴクリと喉が鳴る。少しでも距離を取り、退却の機会を窺う。全方位へ警戒を怠らない。特に後ろを取られてはいけない。

そう、思っていたはずなのに——。

「はい、つかまえたよ」

「——っ!?」

男の両肩に、後ろから少女の手がポンと置かれた。優しい声が耳元で囁かれる。

「ふふふ、ちよつと話を聞かせ——あら？」

背後を取り、勝利を確信したイヴェルだったが、両手で押さえていたはずの男の肩が一瞬で消え

てしまった。暗闇の中、イヴェルの目には男の体が地面の影に沈み込む様子が見えていた。

「……へえ、最後まで切り札を隠してあったってわけね。さて、どこへ逃げちゃったのかしら」

イヴェルは右手を前に差し出す。黒い光とともに、手のひらの上に黒色の手鏡が姿を現す。鏡を覗き込むと、男の姿が映っていた。

「技能スキル『影渡り』。影という不可侵の異空間を通り抜けられる、おんみ隠密向けの移動スキルね」

影の中に潜ったままではいられないらしく、男は影から出たり潜ったりを繰り返す。手鏡に映るのは、おそらく街のどこかにあるガラスの鏡面に映り込んだ光景だろう。

影に潜り込まれたら捕まえるのは容易ではない。しかし、イヴェルは不敵に微笑む。

「この私、鏡の聖獣イーヴェルゲンシュタインの目から逃れられると思わないことね」



ローウェルに面した東の森の出入り口付近に、男の姿があった。影から影へ渡り歩き、ここまで逃げてきていた。

休む間もなくスキルを行使し続けたせいで、なかなか息は整わない。しかし、男は周囲への警戒を怠らなかつた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

(ここまで来れば大丈夫……か？ 移動中も追われている気配はなかつたと思うが……)

ようやく息を整え、男は周囲を見回す。ゆっくりと全方位を見渡し、少女の姿がないことに安堵して前を向くと――。

「はい、ざんねーん」

「……は？」

――目の前に、満面の笑みを浮かべるイヴェルが立っていた。

「ど、どうして……」

「うんうん、見つからないようにものすごく警戒して頑張っていたよね。でもね、しょうがないのよ。私の方があなたよりずっとずっとずっと……格上なんだから」

イヴェルは顔の前でそと両手を重ね、笑顔のままコテリと小首を傾げた。

「ごめーんね」

「う、う、う、うううわああああああああっ！」

男はもはや正気ではいられなかつた。目の前にいるのは愛らしい少女にしか見えない。しかし、目が合った瞬間、男は理解してしまつた。

その瞳の奥に宿る、人ならざる邪悪な気配を。策を弄するなど無駄でしかなく、男は本能のままに少女――イヴェルから脱兎のごとく逃げ出した。

当然、それを許すイヴェルではない。

『殺生魔法『蛇に睨まれた蛙』』

イヴェルの瞳が妖しい光を灯す。恐怖に駆られ、無我夢中で逃げ惑っていた男の体がピタリと停止した。まるで時間が止まってしまったかのように、不自然な体勢で硬直している。

しかし、よく見ると、男は大量の汗を流し、全身が微かに震えていた。両目は見開かれ、恐怖に慄き瞳孔が開く。土を踏みしめるイヴェルの足音が徐々に近づいてくる。逃げられない。

「獲物を狩る前に、恐怖で身動きを封じる魔法よ。素敵でしょう？」

余裕のあるゆつたりとした口調が、逆に恐ろしい。男の体に冷や汗が流れる。

死の恐怖が、迫っていた……。

身動きができない男の肩に、イヴェルはポンと右手を置いた。男の視線の先へ左手を翳すと、黒い光に包まれて大きな丸い鏡が姿を現した。

「あなたはこの鏡の前で己を偽ることはできない。鏡とは真実を映すものだから」

(まあ、錯覚とかで騙したりはできるんだけど)

鏡の鏡面が妖しい光を放ち、男の視界を埋め尽くした。すると、男の表情が和らぎ、まるで半分眠ってしまったかのように瞼がトロンと落ちる。

イヴェルの瞳から妖しい光が消えると男の硬直は解かれ、脱力して地面に膝をついた。意識があるのかないのか、ぼーっとした顔で鏡をじっと見つめている。

「さあ、まずはあなたの名前を教えてちょうだい」

「……俺の名前は、ラック。ハバラスティア王国の諜報部に所属している諜報員」

「ふーん、それで」

「……として潜入している、モリソン王国の諜報員」

「へえ？」

イヴェルは面白そうにニヤリと笑った。

モリソン王国といえば、ハバラスティア王国の南に隣接している国だ。継承問題で荒れることが多く、内政は常に不安定で治安も悪い。国力で劣っているにもかかわらず、ハバラスティア王国に対して高圧的で、当然のように関係は不仲だ。

そんな国の諜報員が、隣国の諜報部に潜入しているとは、どういう了見だろう。

(ふふふ、随分と面白いことになってるんじゃないの?)

「それで? あなたは何のためにこの国に来たのかしら?」

「……国王陛下から、ハバラスティアの聖女を手に入れるよう命じられました」

「ふーん、聖女ね。確か王都にいるんだっけ。それでどうしてローヴェルに?」

「……ローヴェルの冒険者、ヒビキ・マナベに聖者の可能性があったので調査をしに」

「へっ? ヒビキ・マナベが……聖者?」

それから、イヴェルはラックから情報を引き出し続けた。

ラックは元々王都にいる聖女ステファニーの誘拐計画を企てていたらしい。しかし、聖女の警備

を掻い潜るのは『影渡り』が使えるラックでも簡単なことではなく、手をこまねいていたそうだ。そこに新たな聖者候補、ヒビキ・マナベが浮上し、ラックは期待したらしい。しかし、その結果は外れ。ラックの希望は水泡に帰した。

「あーら。残念だったねえ」

「……」

ラックは無言だったが、悔しそうに歯を食いしばっていた。そして、彼の瞳に殺意の光が灯っていることにイヴェルは気が付く。

（おやおや？ これは、ヒビキ・マナベに対する殺意かな？ 自分の思い通りの人間じゃなかったことに対する理不尽な憤りってところかしら……ふーん？ なかなかいいじゃない）

これは何かに使えるかもしれないと、イヴェルは思った。彼女が知る限り、ヒビキに敵対心を抱いた人間を見たことがない。今のところ方法は思い浮かばないが、どこかで鉢合わせて殺意を爆発させられれば、面白いことになりそうな予感がする。

（情報を集めきつたら処分しようかと思ってたけど、案外使い道があるかもしれないわね）

思いの外よい収穫を得たと、イヴェルは笑った。

そして、彼女が求めていた情報をラックは持っていた。彼によると、ヒビキ達は数日前に再び北のダンジョンへ向かったらしい。

「また？ 何のために……いえ、目的は関係ない。とにかく居場所を特定しないと」

大方の情報を得られたイヴェルは丸い鏡を消した。ラックはその場で崩れ落ち、意識を失う。

「情報提供ありがとね。お礼に、殺さないで置いてあげる。この恩は機会を見ていつか返してね」ラックにその声が聞こえるはずもないが、イヴェルは笑顔で言い切ると東の森を後にした。

その後、イヴェルは北のダンジョンへ向かったが、ヒビキ達を見つけることはできなかった。

（うーん、数日の遅れくらいすぐに取り戻せるはずなんだけど、どこにも姿がない）

トントんと地面に足踏みしながら、イヴェルは苛立ちを覚える。これだけ捜してなぜ彼らを見つけないことができないのか。これまでこんなことはなかったのに。

原因を考えるイヴェルは、一つの可能性を見いだした。

「……まさか、本当に地底都市テラダイナスを見つけた？」

彼らの目的は知っている。ダンジョンの最奥にあるといわれる都市、テラダイナスへ辿り着くとだった。聖獣のイヴェルでさえ、その存在について詳細を知らない場所だ。

だが、もし、彼らがそこに辿り着いていたのだとしたら……？

（何らかの手段で自由に行き来できるとしたら、私の力では追えないかも）

地底都市テラダイナスは、神々でさえ干渉することができない未知なる場所だ。神に仕える聖獣に過ぎないイヴェルがどうこうできるはずもない。

「これはお手上げだわ。一度、邪神様に相談した方がよさそうね」

イヴェルはため息をついた。

「メツチャとんぼ返りでメンドくさいなあっ！　そもそもなんでこの世界を創った神々に干渉できない場所があるのよ！」

ダンジョンの中で鬱憤を晴らすように、イヴェルは叫んだ。幸い、その声を聞いた者は近くにはいなかった。いたらきつと大変な目に遭わされたらだろうから、本当に幸いなことだった。



「というわけで、クロード達の居場所が分からないんです、邪神様！」

「……そうですか」

真つ黒な空間。神域にある邪神の領域へ舞い戻ったイヴェルは、今回の件を報告した。

一方はニコニコ笑顔のイヴェル。もう一方は無表情の邪神。瓜二つの二人だが、表情が異なるだけで印象も随分変わる。

「……私の方でも搜索してみましたが、反応はないようですね」

「神域からも捜せないとか、どうなってるんでしょうね？」

「……もう一つの方はどうなのですか？」

「アナスタシアの魂ですか？　そっちも全然ですよ。まったく反応がないんですよ」

イヴェルはヒビキ達だけでなく、アナスタシアの気配も辿れなくなっていた。以前は多少なりとも反応を追えたので、シルバーダイヤモンドウルフに宿るアナスタシアの魂を見つけられたりもしたのだが、今回は小さな反応一つ見つけることができなかった。

「もしかして、アナスタシアもヒビキ・マナベ達と一緒に行動して、隠れていたりして」

「……さすがにないでしょう」

「ですよねえ」

原因は不明だがとにかく、イヴェルは使命を果たせない状況に陥っていた。

邪神は無表情のまま嘆息する。

「……少し離れます。あなたは待機していなさい」

「へ？　あ、はい。分かりました」

イヴェルが返事を言い切る前に、邪神は領域から姿を消してしまった。

「待機ってことは……お休みってことよね！」

パツと満面の笑みを浮かべると、イヴェルはいつの間にか現れた大きなソファアに飛び込んで、寝転がり始めた。

「邪神様が戻ってくるまでダラダラしてよーっと！」

そして、邪神が戻ってきたのは一ヶ月以上経った頃だった。

「……随分と、楽しく過ごしていたようですね」

ソファアの上に寝転がって本を読んでいたイヴェルに影が差す。そっと本をずらせば、無表情でこちらを見下ろす邪神の顔があった。

「あひゃあつ！ お帰りなさい、邪神様！」

イヴェルはバツと本を手放すと、ソファアから立ち上がった。直立不動となるが、ソファアの周りには食べかけのお菓子やら、読みつばなしの本やらが散乱し、彼女のだらけっぷりが一目で分かる光景であった。

「……準備ができたので、あなたには再び地上へ行ってもらいます」

「準備ですか。でも、どうやってクロード達を捜せばいいんです？」

「……彼女を連れて行きなさい」

「彼女？ ……まさか」

邪神は背後に控えていた一人の女性をイヴェルの前に押し出した。

銀の装飾が施された漆黒のローブに身を包み、腰よりも長い白金の髪から生える長い耳は、彼女がエルフであることを示している。

まるで人形のように美しい相貌だ。そう思えるのは、夏の空のような美しい紺碧の瞳が、何者も映してはいないせいかもしれない。その顔に表情はなく、どこを見ているのかも分からない。

いわば魂を失った抜け殻。事実、この肉体に『彼女』はいないのだから。

「……アナスタシア」

イヴェルはその名を呼んだ。かつて勇者だったクロードを裏切り、彼の手によって命を落としたとされるエルフの女性。クロードの育ての親にして、冒険者の仲間だった人。

裏切りが起きた際、クロードの槍で胸を貫かれたアナスタシアの肉体は絶命したはずだった。

「肉体の修復、終わってたんですね。よく依頼人が貸してくれましたね」

「……なかなか説得は大変でした」

「ああ、それでこんなに時間がかかったんですね。ハロー、アナスタシア。元気？」

イヴェルはアナスタシアへ手を振った。彼女はビクリとも動かない。

「邪神様、こんな抜け殻連れてきてどうするんですか？」

イヴェルが言う通り、アナスタシアには本人の魂が入っていない。その魂は分散し、地上のどこかに隠れている。それを捜すのがイヴェルの使命でもあった。

「……彼女自身に自分の魂と、クロードの魂を捜してもらいます」

「そんなことできるんですか？」

「……ええ、そのように処理しましたので」

邪神によると、このアナスタシアの肉体には人工的に創られた魂が宿っているらしい。そして、その魂には肉体にわずかに残ったアナスタシアの魂の残滓が含まれているのだとか。

「つまり、その魂の残滓がアナスタシア本人の魂に反応すると？」

「……はい。人工魂は完全に無垢なる魂で、一切の感情を持っていませんので」

「反応があるとしたら、アナスタシアの魂の残滓の方ってことですか」

「……彼女ならば、クロードにも反応してくれることでしょう」

「まあ、そうかもしれないですね。可哀想にね、アナスタシア。愛を利用されまくっちゃって」

棒読みでヨヨヨと泣き真似をするイヴェル。しかし、彼女は心配そうに邪神を見た。

「私としては助かりますけど、本当に大丈夫です？ 地上に連れてって肉体に何かあっても私、責任なんてとれないんですけど」

「……そこも問題ありません。非常時には強制的に神域へ帰還させる安全装置を人工魂に取り付けましたので」

邪神の説明によると、人工魂と安全装置の作製が、今日まで時間がかかった主な理由らしい。

「依頼人の方で対策してくれているなら問題なさそうですね」

「……それでは、アナスタシアとともに地上へ向かい、使命を果たしてください」

「分かりました！ それじゃあ、行ってきます！」

こうして、イヴェルとからっぽのアナスタシアは地上へ降り立った。

「それでアナスタシア。私達はどこへ向かえばいいの？」

東の森へ降り立ち、イヴェルはアナスタシアへ問う。彼女はしばらく身動きせずじっとしていた

が、やがてゆつつつと周囲を見回し始めた。

(めっちゃおそい……)

お茶を一杯できそうなほどゆつたりとした時間が流れ、やがてアナスタシアはこれまたゆつくりと右手を上げると一つの方角を指差した。

「ふーん、あっちにクロードか、それともあなたの魂か。何か惹かれるものがあるのね」

アナスタシアは指を差したまま、じっと動かない。だが、方針は決まった。

イヴェルは楽しそうに微笑む。

「方角的には南かな？ ふふふ、何が待っているのか楽しみね♪ それじゃ、行きましようか」

まずは東の森を出て、改めてアナスタシアに方角を示してもらおうのがいいだろう。

イヴェルは意気揚々と歩き出した。

それからしばらくして――。

「ちょっと！ ついてきなさいよ！」

全く歩く気配もなく、その場に立ち尽くしていたアナスタシアの手を引いて、イヴェルは再び歩き出すのだった。



「ふわぁ……」

大きな欠伸をしながら、俺——真名部響生は目を覚ました。寝ぼけた頭で上体を起こし、ここがローウエルの宿『微笑の女神亭』であることを思い出す。

部屋の明かりはついていない。それでも窓から差し込む朝日のおかげで、思ったよりも室内は明るかった。

今は一月の下旬。冬のこの時期にすでに日が昇っているということは、どうやら少し寝坊してしまっただけ。

室内を見回してみると、部屋にいるのは俺一人だけだ。

ベッドから降り、窓辺に立って街並みを眺める。王都では雪が降り、一面が白く染まっていたが、ローウエルの街にはその気配はない。目に映るのは、記憶どおりの風景だった。

「起こしてくれてもよかったのに……あっ」

無意識のうちに、肩口で右手の指をくると回す。しかし指先は空を切った。つい最近まで、そこにあつたはずの長い髪がない。

「……まだ癖をやっちゃうな。もう男に戻ったつてのに」

思わず苦笑が漏れる。少し前までの自分を思い出してしまったからだ。

いや、本当に……短いようで、長い旅だった。

テラダイナスで姉さんこと理神の忠告を無視し、人前でスキル『コトワリコトノハ』を使ってしまった。『コトワリコトノハ』は理神の力の一端で、物理法則や人の心理といった「この世の理」に干渉できる。あまりに強力な反面、一歩間違えれば俺の魂を危険に晒す。

そして一度死にかけたことをきっかけに、俺の体は女性化してしまったのだ。

夢で会った主神様の導きに従い、手がかりを求めてハバラストティア王国の王都バステイオンを訪れた俺は、そこで姉さんの二体の聖獣を復活させることができた。

『信仰』の聖獣『ゼクス・グラウベ』と、『生命』の聖獣『フィア・リーヴン』だ。

そしてこのうち、『生命』の聖獣であるリーヴンの力によって、俺の遺伝子情報は修正され、男の体を取り戻すことができた。

今のステータスは、こんな感じ。

【技能スキル『鑑定レベル7』を行使します】

【名前】真名部響生

【性別】男

【年齢】17

【種族】ヒト種（非表示…現人神）

【状態】健康

- 【職業】鑑定士(仮) (レベル46)
- 【レベル】53
- 【HP】621/621
- 【MP】399/399
- 【SP】1209/1209
- 【物理攻撃力】296
- 【物理防御力】223
- 【魔法攻撃力】281
- 【魔法防御力】179
- 【俊敏性】523
- 【知力】610
- 【精神力】986
- 【運】65
- 【固有スキル】『識者の眼(オリジン)』
- 【技能スキル】『鑑定レベル7』『翻訳レベル2』『魔導書レベル2』『宝箱レベル9』『契約レベル3』『医学書レベル2』『暗号解読レベル2』『精霊司術レベル2』『魔法解析レベル4』『震感知レベル8』『気配察知レベル8』『瞬脚レベル7』

- 『流脚レベル6』『体幹制御レベル7』『剣技レベル』『世界地図レベル4』
- 『複製転写レベル5』『救済措置レベル3』『自動書記レベル5』
- 『聖獣召喚レベル』『辞書レベル4』
- 【魔法スキル】『生活魔法レベル7』『火魔法レベル2』『風魔法レベル』
- 【称号】『医療従事者』

うんうん。ちゃんと性別は男に戻っている。種族名はヒト種になっているけど、非表示の項目には現人神が残ったままで。

たぶん、表面上はヒト種に戻ったものの、姉さん成分を内包している俺は、根本的には現人神のままってことなんだろう。

すると、俺の中に宿る姉さんの聖獣、サポちゃんが補足してくれる。

『サポちゃんより報告。一般的な鑑定士が『鑑定』を行使した場合、ヒビキ様の種族名はヒト種として認識されます。サポちゃんより以上』

それはよかった。これで、この前ダニエルさんに見破られた時みたいな心配はしなくて済みそ
うだ。

男に戻れた以上、姉さん復活のため、俺は次の聖獣を捜さなければならない。

『信仰』の聖獣グラウベがくれた力『聖位理針』が、次なる聖獣の居場所を示してくれた。エルフのエマリアさんの故郷、フェアルノート王国。その王都コールフェルト。

ローエルへ戻った俺達は、冒険者ギルドでギルドマスターのバルス兄貴、副ギルドマスターのジュエルさんと合流し、今後の方針についてみんなで話し合った。

多少バタつきはしたものの、会議自体は滞りなく終了したけど……。

「サボちゃん、お願い」

『サボちゃんより報告。申請を受諾。技能スキル『宝箱』を行使します。サボちゃんより以上』

次の瞬間、俺の右手には神弓しんきゅうグロイーイングボウが握られていた。

サボちゃんが『理解』の聖獣『アインス・フェアシュティン』としての力を使い、『宝箱』の異空間から引き寄せてくれたのだ。

神弓グロイーイングボウ。主神様が与えてくれた、俺専用の武器だ。

名前の通り、使い手である俺とともに成長していくらしいのだが、ダンジョンに入ってから、これといった変化は見られなかった。

後になって主神様から教えられたことだが、ダンジョン内では主神様の力が届かず、経験値だけ

が溜まり、レベルアップが止められた状態になっていたらしい。

地上へ戻り、王都で借りた屋敷の庭で取り出した瞬間、グロイーイングボウは樹木の姿へと変化した。

そこからしばらくの間、一気にレベルアップした器を安定させるため、熟成期間に入っていた。会議が終わった直後、それが完了したことを俺は察知した。

反射的に『コトワリコトノハ』で王都へ転移し、成長を遂げたグロイーイングボウを手に入れたのである。それが、昨夜のことだ。

【技能スキル『鑑定レベルF』を行使します】

【名前】神弓『グロイーイングボウ』

【物理攻撃力】80

【魔法攻撃力】150

【備考】主神が創りし『ヒビキ・マナへ』専用の弓。所有者の意思で三つの形態を取る。

見た目は以前と変わらない。ただ、物理攻撃力と魔法攻撃力が、ほんの少しだけ強化されていたけれど、一番目を引いたのは備考欄だ。そこに記されている『三つの形態』という文字。

形態、つてことは……変形したりするのだろうか？

『サポちゃんより報告。グロイーングボウの能力を検証しましょう。サポちゃんより以上』

そうだね。フェアルノート王国へ向かうまでは、まだ数日ある。今日はそれをやるのも悪くなさそうだ。

サポちゃんにグロイーングボウを収納してもらい、うんと背伸びをした、その時だった。

部屋の扉が開く音がして、俺は振り返る。

「おはようございます、ヒビキ様」

「キユウー」

声をかけてくれたのは、黒狼族こくろうぞくの獣人で騎士のクロード。そして彼の肩には、クリスタルホーンラビットのシアが乗っていた。

彼女の角つのはとても稀少で、普段は俺の幼馴染にして魔導錬金術師まどうれんきんじゆし、亜麻音あまねの魔法道具によって、普通のホーンラビットの角に偽装されている。

これで、この部屋の同居人が揃ったことになる。

最初にこの宿を借りた時は、俺とクロード、妹分のリリアンに魔法の師匠ヴェネクんの四人だけだった。

そこに荷運びホーギのユーリとエマリアさん、さらにシアも加わり、さすがに一部屋では収まりきらな

くなくなった。

そんなわけで、今は男女に分かれて部屋を借りている。

本来なら、この部屋にはシアではなくヴェネくんがいるべきなのかもしれない。でも、シアはクロードにすっかり懐いているし、ヴェネくんは『魔導書』の化身としてリリアンをサポートすると主張している。結果、今の振り分けに落ち着いたわけだ。

「おはよう、クロード、シア。ちょっと寝坊しちゃったかな？」

「食堂はまだ空いていますから、大丈夫ですよ。朝食はどうされますか」

「すぐ行くよ。着替えるから少し待って」

さっと身支度を整え、俺達は一階の食堂へ向かった。

テーブルには、すでにエマリアさん達の姿がある。どうやら俺を待っていてくれたらしい。

「おはよう、みんな。待たせちゃってごめんね」

「おはよう、ヒビキ。今日はお寝坊さんね。髪、跳ねてるわよ」

「えっ、本当？」

エマリアさんに指摘され、慌てて髪を梳かす。でも……たぶん、直ってないだろうな。

エマリアさんはクスクスと笑いながら、俺を見上げていた。

仕方なく、寝癖はそのままに席に着く。

「改めまして、おはよう。昨日ので疲れちゃったのかな？ 遅くなってごめん」

そう言うと、ユーリが楽しそうに微笑んだ。

「私達も、ついさっき来たばかりですから大丈夫ですよ。ね？ リリアンちゃん」

「うん。エマリアさん、とっても気持ちよさそうに眠ってたの」

「ちよっと、二人とも!? それは内緒って言ったでしょう!？」

エマリアさんは頬を赤らめ、慌てだす。どうやら女子部屋では、彼女が一番起きるのが遅かったらしい。

そういえば、初めて会った日。野営をした翌朝は俺が先に目を覚ましてたっけ……。

「ち、違うのよ、ヒビキ！ 普段の私は寝坊なんてしないんだから。今朝は、たまたまなのよ!」

「まあ、今朝一番の寝坊は俺だし、気にしないよ」

年上としての威厳を気にしているのかもしれないけど、慌てた様子がどこか可愛らしい。

ユーリもリリアンも、微笑ましそうにエマリアさんを見守っていた。まあ、俺もただね！

やがて落ち着きを取り戻し、みんなで朝食を取る。

それを終えると、今日の予定について話し合いを始めた。

「俺は戻ってきたグロイイングボウの性能チェックをしようと思ってるんだけど、みんなは?」

本当はすぐにでもフェアルノート王国へ向かいたいところだけど、エマリアさんによると、あの国の住人はほとんどがエルフで、ヒト種の俺達が入国すると目立つらしい。

そのために活躍するのが、王都でも使った亜麻音の『変装リング』だ。この魔法道具でエルフに

変身して、聖獣捜しをする予定。しかし、エルフ仕様に改造した全員分のリングを用意するには数日かかるらしい。

さらに、フェアルノート王国へ転移するには、エマリアさんの弟、ラクリシアさんにポータルストーン of 転移座標を設定してもらう必要がある。彼が王国に到着するまでは、どうあっても転移できない。

だから、まだ数日はここロウエルで準備が整うのを待たなければならなかった。

その間に、グロイイングボウの性能チェックをするというわけだ。

俺がそう説明すると、全員が東の森についてくると答えた。

「いいの？ みんな。やりたいことがあれば、していいんだけど」

「あら、弓の名手である私が一緒にいた方が助かると思うわよ」

自信ありげに微笑むエマリアさん。

「ヒビキ様が森へ行かれるのであれば、護衛としてついて行きます」

「クロさんが行くなら、私も行くの」

誓いを立てるように告げるクロードに、リリアンも続く。そして、テーブルの上でヴェネくんが

ポンと胸を叩いた。

「神器じんぎを扱うなら、聖獣のヴェネと一緒にいた方がいいにやね」

「私一人だけ残っても寂しいですし、よかつたら一緒にさせてください」

「キユウツ」

ユーリとシアも続き、どうやら全員ついてくるらしい。

この光景を見て、王都近くの森で『コトワリコトノハ』の能力チェックをした時のことを思い出した。

「じゃあ、みんなで行こうか」

俺がそう言うと、全員が笑顔でコクリと頷いた。

装備を整え、俺達は宿を出る。すると、出入り口に親友の大樹たつきが立っていた。

大樹達『死者殺し』のメンバーは別の宿に泊まっていたはずなのに、どうしたんだろう？

「おはよう、響生。どっか出かけるのか？」

「うん。みんなでちよつと東の森まで」

「そっか！ だったら俺も一緒につれてってくれ！」

亜麻音は『変装リング』の改造を、俺の従兄いとこで担任の候兄ちゃんと、亜麻音の親友の恭子ちゃんきょうこはその手伝いをしているらしい。

「お願いしている俺が言うのもなんだけど、大樹は手伝わなくていいの？」

そつと視線と肩を落とす大樹。背後に闇を感じる。

「……戦力外通告をされました」

「ああ、うん」

そうだね。大樹って、そういうの向いてなかったね。この場の全員が、何となく納得した。

「分かった。じゃあ、一緒に行こうか」

「そうこなくつちな！ それじゃあ、行くぜ、東の森へ！」

そうして俺達は、大樹を先頭に東の森へ向かった。

「……このパーティーのリーダーはヒビキ様なのに」

クロード、しっ！ 今はそつとしておいてあげて！



「それで、成長したヒビキの弓って、何ができるの？」

東の森をしばらく歩き、少し開けた場所に着いたところで、エマリアさんが尋ねた。

「ちよつと待つてね」

俺はサポちゃんに頼んで、グローイングボウを手元に引き寄せる。改めて弓を鑑定すると、その結果を『自動書記』スキルで空中に書き出した。

鑑定結果には、先ほど見た情報に加え、三つの形態の詳細が記されていた。

『短弓モード』 神弓グロウイングボウの標準形態。以前と変わらぬ使い勝手。
『連弩モード』 片手の小型クロスボウ。魔法の矢専用形態で、速射と連射に優れる。
『長弓モード』 最も攻撃力が高い形態。弓を引き絞る時間に比例して威力が増す。

鑑定結果を見つめるみんな。リリアンは首を傾げている。

「こんな感じだね」

「一応理解はできるけど……ちよつと端的すぎるわね。やつぱり実際に使ってみた方が早そう」

エマリアさんの言葉に、俺達は頷く。正直、俺もよく分かっていない。実践あるのみだ。

というわけで、まずは短弓モードを試すことにした。要するに、いつものグロウイングボウだ。

エマリアさんが魔法で周囲の木々に的を作る。番号が振られた的に向かって、俺は順番に矢を放つ。全部、真ん中に命中した。

「へえ、エルフ基準だとまだどこもない構えだけど、命中率は高いわね」

『識者の眼』のおかげだね。結構練習したんだけど、姿勢とかまだダメかな？」

「最低限はできてるわよ。でも、弓を使い始めてまだ一年も経ってないんでしょ？ 伸び代はたっぷりあるわ。練習あるのみ！」

後ろで腕を組み、楽しそうに指導するエマリアさん。そのさらに後ろにクロードが立ち、口を開いた。

「ヒビキ様、動局的を射る練習もやってみましょう。エマリア殿、用意できますか」

そこにヴェネくんが割り込む。

「はいはいにやあ！ 見てるだけとかつまらないにや！ ここはリリアンちゃんに任せるにや！」

「リリアンですか？ ……できるか、リリアン」

クロードの問いに、リリアンは嬉しそうに顔を輝かせ、杖を構えた。

「うん！ 任せて、クロードさん！ ……火魔法『ヒートレスキャンドル』！」

杖から拳大の火の玉が次々と生まれ、俺の前を漂い始める。

森の中で火を使うなんて、大丈夫だろうか。

「心配は無用にや！ これは熱を持たない炎だから、触っても火傷しないにや」

「そのかわり、とっても弱い。矢が当たったら弾けて消えちゃうし、熱くないから森が燃えたりもしないの」

リリアンの説明を聞き、俺は矢をつがえる。

リリアンが操る小さな火の玉を、光の矢で次々と射抜く。動かないのより少し時間はかかるが、

『識者の眼』の命中補正のおかげか、全部射抜くことができた。

「まあ、上々かしら？」

「そうですね。あとは敵に妨害された場合でも、この命中精度を保てるかが問題ですが、今はそこまで考えなくてもよいでしょう」

エマリアさんとクロードは、俺の様子を見ながらそう告げた。

「なあなあ、他の弓も見てみようぜ」

後ろで大樹が言い、次は連弩モードを使ってみることになった。

……というか、どうやって変形させればいいんだろう。

『サボちゃんより報告。頭の中で命じるだけで問題ありません。サボちゃんより以上』

助言に従い、心の中で連弩モードを念じる。するとグロウイングボウが白く光り、その形を変えていった。

やがてそれは、小さなクロスボウになった。想像よりもずっと小さい。一般的なクロスボウは両手で構えて使うはずだが、これはまるで拳銃のようだ。

魔法の矢専用の形態で、つがえられている光の矢は十センチほどしかなかった。

「ちっさ！ おもちゃみたいだな」

大樹が連弩モードの姿を見て零す。俺もちょっと同意する。

クロードも覗き込み、首を傾げた。

「ふむ、確か連弩とは矢を連続で発射できる構造だったと記憶していますが……普通のクロスボウに見えますね」

エマリアさんも同意する。

「エルフはあまりこの手の弓を好まないから詳しくないけど、連射できるようには見えないわ」

「でも、なんだか可愛らしいです」

ユーリが少し楽しそうに言った。しかしその余裕は長く続かなかった。

俺は見様見真似で拳銃のように構え、木々の的に向かって引き金を引いた。

光の矢はスパッと打ち出され、的の真ん中に命中する。引き金は軽く、思わず感心していると、自動で弦が動き、次の矢がつがえられた。

連弩モードは速射と連射に優れている、と鑑定で見たことを思い出す。

俺は引き金を連続で引いた。

ほぼ瞬間的に次弾が装填され、矢が間断なく飛び出す。シューティングゲームでビームを連射しているような感覚だ。片手で軽々撃てるので、『識者の眼』の命中補正との相性もいい。

一発の消費MPは1。今の俺なら三百連発くらいできる計算だ。

「うわあ、えげつなあ……」

後ろで大樹が小さく呟く。

エマリアさんは真剣な表情で俺を見つめ、評価を口にした。

「凄い連射性ね。でも威力と射程は半減しているかしら」

その通りだ。連弩モードは速射・連射に優れるが、殺傷能力は低めだ。遠くの的に届く前に、光

が霧散むざんしてしまふ矢もいくつかあった。

「私だったら、射程範囲外まで逃げて、そこから弓でヒビキを撃ち抜くかしら」
冷徹に告げるエマリアさんの隣で、クロードも淡々と口を開いた。

「逆に私はヒビキ様の懐まで入り込んで、近接戦に持ち込むでしょうね」

二人の本気度が恐ろしくて、思わず後ろを振り返る。

「二人とも……ちよつと怖いよ」

俺が苦言を呈すと、エマリアさんとクロードは苦笑した。

「ごめんなさいね。狩人の性かりゆしのさがつてやつかしら」

「申し訳ありません、ヒビキ様。ですが、ヒビキ様のためにも必要なことですから」

分かつてはいるんだけどね。二人が考える対策は、もし敵に使われたら厄介な手段だ。事前に備えておく価値はある。

その後、リリアンにもう一度『ヒートレスキャンダル』を使ってもらい、動く標的を撃ち抜く練習をした。

威力は弱く、人に当たっても急所でなければ致命傷にはならない。

数撃ちや当たる感覚だ。他の弓の形態と組み合わせれば、戦い方の自由度はかなり高そうだ。

「最後は長弓モードを試してみましよう」

クロードに促され、俺は長弓モードを念じた。クロスボウは白く輝き、再び姿を変える。形状は

エマリアさんが持っている弓によく似ていた。

確か、弓を引き絞る時間が長いほど、威力が増していくんだっけ？

俺は弓を引いてみた……んだけど、重いつ！

「これは、ちよつと……つらいかも」

短弓モードでは感じなかった負荷に、右腕が悲鳴を上げる。あとでめつちや筋肉痛になりそう！

「ヒビキ、可能な限り引き絞ってみて」

「う、うん……だけど、あんまり持たな——あつ」

十五秒ほどで限界が来て、手が弦から離れてしまった。

その瞬間、光の矢が木の幹へ向かって放たれる。体はぶれて的から外れたが、矢は幹に届いた。

光の矢が木の幹に突き刺さる……そんな俺の予想を超える光景が広がった。

「これは……」

クロードが呆然と呟く。

光の矢は木を貫通し、直径と同じくらいの穴が開いていた。さらに、その向こうの木にも刺さる。

すぐに光は空気に溶けて消えたが、射程距離は短弓モードの倍以上ありそうだ。威力も段違い。

クロードに促され、俺はもう一度弓を引いた。

「ぐっ、ぐぐぐぐ……んんっ」

「ヒビキ、もうちよつと頑張つて。バルスじゃないけど筋肉よ、パワーよ！」

「ヒビキ様、バルス殿ではありませんが、根性ですよ！」

「ご、ごめん、なんか力が抜けそうだから、その応援はやめて……」

エマリアさんとクロードから、ちょっと嬉しくない声援を受けつつ、俺は限界まで弓を引き絞る。だけど、三十秒が限界だった。

「もう、限界っ！——っ!?」

手を離すと同時に閃光が走る。光の矢の直径が膨張し、極太の矢となって飛び出した。狙いは少しブレたが、矢は木の幹に命中した。

瞬間、木は爆散し、倒れる音が森に響き渡る。矢はさらに奥へ消えていき、遠くで別の木が倒れる音も聞こえた。かなりの距離で威力が維持されたらしい。

「……三十秒でこれですか。凄まじいですね」

クロードが息を呑む。俺は呼吸が荒くなり、どっと疲労が押し寄せて膝をついた。

「ヒビキさん、大丈夫ですか!?」

ユーリが背中をさすってくれる。何だろう、これ。百メートルを全力疾走したみたいな感覚だ。

「威力が強い半面、負担も大きいみたいじゃね」

考察するヴェネクンの言う通り、長弓モードは扱いにくい形態のようだ。

あとで確認したが、弓を一秒引き絞るごとにSPを1消費する。三十秒なら30、加えて魔法の矢ならMPが30必要だった。

数値だけ見れば連発も可能だが、実際には一発で体力を削られてしまう。HPは減っていないみたいだけど、消耗が激しい。今のところ気軽に使えるものではなかった。

「なかなか使い勝手が難しいわね。この威力なら大抵の魔物は一撃で倒せそうだけど、直後の隙が大きすぎるわ。最後の切り札って感じね」

エマリアさんの言う通りだ。俺もそう思う。

たぶん、リリアンならこれと同じくらいの威力の魔法を使えるだろう。だけど、決め手に欠けていた俺に、この威力の攻撃手段ができたことは素直に嬉しい。

こうして、グロイングボウの三つの形態をひと通り確認できた。あとは訓練あるのみ。三つのモードを上手く使いこなしたい。

時間はお昼を過ぎた頃。ユーリとエマリアさんが中心になってお昼ご飯を用意してくれたので、森の中で昼食を済ませる。

「みんな、付き合ってくれてありがとう」

休憩を挟み、体力が回復した俺は感謝の言葉を口にする。

「それじゃあ、この後はどうしましょうか。ヒビキの弓の訓練を続ける？」

エマリアさんが尋ねるが、正直今日はもう遠慮したい。クロードも考え込むように口元に手を添えている。

そこに大樹が立ち上がり、胸の前で拳を握った。

「なあ、せっかく森に来たんだし、訓練じゃなくて狩りをしようぜ！ みんなで狩り勝負だ！」



というわけで、みんなで狩り勝負をすることになった……なんでだ！?

「訓練ばかりじゃ確かにつまらないものね。いいんじゃないかしら」

「確かに、実戦で養^{やしな}える感覚もあります。今のヒビキ様にはちょうどよいかと」

エマリアさんとクロードが賛同してしまい、リアンとユーリがそれに反対するはずもなく、狩り勝負はあっさり採用されてしまった。

「でも大樹、それって一人でやるの？ ユーリやリアンが心配なんだけど」

無職のユーリは単独の戦闘力が不安だし、リアンはまだ十歳だ。いくら強力な魔法が使える賢^{けん}者^{じゃ}だとしても、一人で森を歩かせるわけにはいかない。

「だったら二人一組でどうだ。三組のうち二組にはペット枠もつくけど」

「誰がペットにゃ！」

「キユウツ！」

ヴェネくんが叫ぶと、シアも同意するかのように首を縦に振った。苦笑しつつ、大樹は進行を続ける。

「んじゃあ、組み分けの方法だけど」

「私はヒビキ様と」

「私はヒビキと」

クロードとエマリアさんが同時に手を挙げた。睨み合う二人。訓練の時は結構仲よさそうにしてたのに……。

「はいはい、組み分けはくじ引きな。同じ色の紙を引いた奴らで組むぞ」

大樹は右手に握った八本の細い紙をみんなの前に突き出す。どうやら手に握ったところに色がついていているらしい。

「こんなのよく持ってたね」

「いついかなる時も、こういうイベントのために持ち歩いてるんだ」

自慢げに鼻筋を指でこする大樹。一体何を想定しているのやら……。

「まあ、くじ引きなら公平か。じゃあ、俺はこれにしようかな」

「——っ！ 私はこれを——」

俺がくじを引くと、反射的にクロードとエマリアさんもくじを手を取った。ユーリ、リアン、ヴェネくん、シアが続き、組み分けが決まる。

ユーリとリアン、そしてヴェネくんの青色チーム。

俺と大樹、シアの黄色チーム。

そして、クロードとエマリアさんの赤色チームだ。

「なぜこうなる……」

ハモる二人は、ガクリと肩を落とした。

「リリアンちゃん。私、あんまり役に立てないかもしれないけど、よろしくね」

「ユーリちゃんと一緒に嬉しい。がんばろうね！」

「ヴェネがすっかり森の狩りを教えてあげるにゃ！ どんと任せるにゃ！」

ユーリ達のチームは和気藹々としていた。

「よし、響生、シア。俺達の友情パワーで優勝を目指そうぜ！」

「大樹って狩り得意なの？」

「あんまり経験ない。大抵亜麻音が遠距離からズドンだったしな。だが、俺ならできる！」

「キユウ？」

根拠のない自信を迸らせる大樹に、シアは不思議そうに首を傾げる。まあ、大樹がゲームを楽しむのはいつものことなので、彼らしいと言えそうなんだけど。

「……」

明るい二チームとは対照的に、クロードとエマリアさんは無言。

戦闘や、さっきの訓練の指導では上手く連携できているのに、二人きりだと随分ぎこちない。相性が悪いのだろうか。二人のチームだけ、明らかにモチベーションが低い。

「んじゃ、この三チームに分かれて狩りを競うわけだが……やっぱり、優勝者にはご褒美がほしいよな」

大樹がそう言うと、クロードとエマリアさんの耳がピクリと動いた。

「ご褒美って、何にするの、大樹？」

「うーん、そうだなあ……優勝チームは何でも一つお願いを聞いてもらえるところでいいんじゃないかな」

「ええっ、なんで俺？」

「俺達のリーダーは響生なんだから当然だろう？ いいじゃん、頼むよ親友！」

「……もう、調子がいいんだから。まあ、常識の範疇で頼むね、みんな」

俺がそう言うと、クロードとエマリアさんはカッと目を見開いた。

「やるわよ、クロード」

「ええ、エマリア殿……勝利を我らの手に」

エマリアさんは弓を強く握りしめ、クロードも槍を構えた。やる気が出たのを察した大樹が不敵に笑う。

「んじゃあ、狩り勝負を始めるぜ！」

俺達は三方向に分かれて、狩りを始めるのだった。



「よし、響生。『世界地図』で魔物の位置を割り出してくれ！」

しばらく歩き、周囲に他のチームの姿がなくなった頃、大樹が声をかけた。

「えっ？ しないよ」

「ええええっ!? 何でだよー！」

俺は即座に拒否し、大樹は予想外だと言わんばかりに叫ぶ。

技能スキル『世界地図』。その名の通り、地図のスキルだ。まだスキルレベルが足りず、広域の地図を見ることはできないが、俺を中心に周辺の地形や魔物の分布を把握できる。狩りにはうってつけのスキルながら、今回は使いたくなかった。

「だって、『世界地図』で魔物を探すのはちよつとスルみたいで不公平な気がする」

「スキルの有無も実力のうちだぜ。当てにしていたのに、使わないとか言うなよ」

「『気配察知』とかで十分でしょ。ほら、文句ばかり言っただけで獲物を探そう」

「……ちえ〜」

ふて腐れつつも、大樹は歩き出した。すぐに気持ちを切り替えたのか、周囲へ意識を向ける。

歩きながら、俺は大樹に尋ねた。

「そういえば、大樹は優勝したら何をお願いするつもりだったの？」

「そりゃもちろん、エマリアさんとのデート権だ！」

「……それは、俺には叶えられないお願いだね。却下で」

「キュウキュウッ！」

「マジかよ!? あつ、いててつ、やめろシア! あいててつ!」

大樹の頭にのつかると、シアは小さな前足でペシペシと叩き始める。

まあ、狩り勝負の賞品でデート権なんて頼まれても、叶えられるわけないから仕方ない。

「ところで、俺達のチームが優勝したら、俺のお願いは誰が叶えてくれるの?」

俺の質問に、大樹はそつと目を逸らして口を開く。

「……神様は、願い事を叶える立場なんだぜ」

「……そこは大樹が叶えてよ」

「なんで俺の願いは叶えてもらえないのに、俺が響生の願いを叶えなくちゃいけないんだ！」

「その言葉、そつくりそのままお返しするんだけど！」

「……キュウ」

言い合いながら歩く俺達に、シアは大樹の頭の上で、処置なしでも言いたげに首を横に振ってみせるのだった。

それからしばらく歩き続けたけど、意外なほどに獲物に出会えなかった。